

## 317

日本病理剖検輯報よりみた若年者（40才未満）の肺癌とその推移（1958—82年）

浜松医科大学第一病理  
森田豊彦

目的：昨年の本学会で日本病理剖検輯報（1958—81年）の肺癌症例につき検討し，実数の推移や他腫瘍との関係，剖検男女肺癌の明瞭な高齢化を報告（肺癌23：310，1983）し，更に高年者（70才以上）の肺癌の特徴を示した（肺癌23：418，1983）が，今回17才男子の肺癌症例を剖検する機会を得，若年者（40才未満）の肺癌の特徴を捕えるため以下の検討を行ったのでその結果を報告する。

方法：日本病理剖検輯報第1—25輯（1958—82年度）に記載された性別，年齢の明らかな肺癌剖検例につき，男女別，年齢階層別に組織型を調べた。重複癌のうち全身に影響の少ない肺癌，潜在肺癌例は除いた。結果を各年毎，5年区分（第1—5期）及び10年区分して推移を見た。若年者，中年（40—69才），高年（70才以上）肺癌の間の比較を行った。

結果：1. 全体の傾向 若年者の肺癌症例数は男性1期115例から5期の192例，女性1期48例から3—5期の110例前後と実数は増加しているが，全年令肺癌中の割合は男性6.2%から1.7%へ，女性8.1%から2.9%へとむしろ漸減傾向が認められた。

2. 男女比 5年区分で若年者は1.5—2.4，中年者は2.8—3.1，高年者は3.1—3.4の間にあり，1—5期とも例外なく若年者，中年者，高年者の順に男女比が高くなっていく傾向があった。

3. 年齢階層別組織型割合 25年分と最近の5年分につき検討した。男性：腺癌30代で順に53と62%を占め最も多く，70代の30%へ漸減する。扁平上皮癌は20代に最も少なく10%と7%で，80代の38と39%へ漸増する。小細胞癌は30代の10%が最も低く，70代14%と60代19%へと漸増する。女性：腺癌30代の66%と73%が最も多く，70代の49%へ漸減する。扁平上皮癌は20代の2%と30代の6%が最も少なく，90代の28と29%へ漸増する。

4. 若年者肺癌組織型割合推移 男性：5年区分で腺癌が3期47%から5期59%へと漸増，扁平上皮癌3期19%から5期7%へと漸減。女性：腺癌が3期53%から5期72%へ漸増，扁平上皮癌が3期16%から5期5%へと漸減しており，男女同じ傾向が認められた。

5. 若，中，高年者組織型割合 男性：腺癌若52，中36，高31%と漸減，扁平上皮癌は順に若14，中31，高38%と漸増，小細胞癌も若11，中12.7，高13.3%と漸増。女性：腺癌若64，中58，高58%と漸減。扁平上皮癌は順に若8，中17，高23%と漸増，小細胞癌も順に若8.5，中9.2，高12%と漸増。男女大細胞癌，未分化癌（己むを得ずそのまま使用），混合型及び少数の特殊組織型（カルチノイドなど）についても若年，中年，高年群の順に従い漸増あるいは漸減傾向があった。

## 318

## 若年者肺癌例の検討

国立療養所沖繩病院：内科<sup>1)</sup>，外科<sup>2)</sup>

○久場睦夫<sup>1)</sup>，仲宗根恵俊<sup>1)</sup>，宮城 茂<sup>1)</sup>，下地克佳<sup>1)</sup>，  
大城盛夫<sup>1)</sup>，石川清司<sup>2)</sup>，国吉真行<sup>2)</sup>，城間 寛<sup>2)</sup>，  
前里和夫<sup>2)</sup>，源河圭一郎<sup>2)</sup>

琉球大学：第一内科<sup>3)</sup>，中央検査部<sup>4)</sup>

大宜見辰雄<sup>3)</sup>，外間政哲<sup>4)</sup>

若年者肺癌は，一般に経過が急速で予後不良な事がいわれている。又，若年であるが故に非癌疾患と誤まれ診断の遅れる事もしばしば指摘されている。今回我々は，自験例における若年者肺癌の臨床像及び問題点を把握するために過去12年間に経験した40才未満の原発性肺癌症例について検討を行い若干の知見を得たので報告する。

対象：昭和47年1月より昭和58年12月までに経験した原発性肺癌842例中，39才以下の9例を対象とし検討を行った。

結果：39才以下の原発性肺癌は，自験全肺癌842例中1.06%の頻度であり，年齢分布は25才～29才が2例，30才～34才2例，35才～39才5例で最年少は29才であった。性別では男性5例，女性4例で全肺癌中の男女比3.29対1に比し1.25対1と女性の比率が高い。発見動機は，集検発見が6例，他疾患観察中が1例，咳嗽・胸痛が1例，呼吸困難が1例であった。

集検発見の6例中3例では，2例が各々8ヶ月，1年5ヶ月間の抗結核薬投与後，1例が7ヶ月間放置後転移症状をみて来院している。発見時症状の2例はいづれもⅢ，Ⅳ期と進行していた。組織型は，腺癌が7例と圧倒的に多く，他2例は扁平上皮癌と大細胞癌であった。喫煙歴は3例にみられたがB.I.400以上は2例のみであった。又，2例に癌の家族歴が認められた。来院時の胸写所見は，肺野腫瘍型5例，肺門腫瘍型2例，無気肺1例，散布型1例であり，臨床病期はⅠ期2例，Ⅱ期1例，Ⅲ期2例，Ⅳ期4例であった。

治療は手術例が4例，化療3例，化療+放射線2例であった。確診後の予後は，手術不能例では大半が1～3ヶ月と極めて不良であったが，切除例では5年生存例が1例みられた。

総括：今回我々の経験した若年者肺癌は9例と少く明らかな臨床的特徴を見出す事は難しいが，従来いわれているように性別では女性の比率が高い傾向にあり，組織型は腺癌が大部分（77.8%）を占めた。

発見動機としては，集検例が比較的多かったがこのうち半数では結核の治療等が行われ確診に至るまで長期間経過していた。

予後に関しては，手術不能例では極めて不良であった。しかし，早期切除例では5年生存例もみられ，胸写異常発見時には若年者においても肺癌を念頭において早期の検索が不可欠であると考えられる。